

資料紹介—坂本繁二郎滞欧期の絵葉書

Reference Materials: Picture Postcards from Sakamoto Hanjiro's Time in Europe

伊藤 絵里子

ITO Eriko

坂本繁二郎(1882–1969)の滞欧期のアルバム(fig. 1)が、2021(令和3)年7月にご遺族より石橋財団へ寄贈された。坂本は、いまから100年前の1921(大正10)年7月31日、39歳のときに、渡欧の途につき、3年の月日をフランスで過ごした。現地で購入したと思われるそのアルバムには、430枚の葉書が保管されている。筆まめな坂本は多数の書簡を遺したが、このアルバムにも滞欧中の坂本に宛てて知人、友人から郵送された葉書106通が収められており、当時の坂本が連絡をとりあった交友関係がうかがえる。さらに注目すべきは、郵便で届いたそれらの葉書以外に、このアルバムには通信文のない未使用の絵葉書も324枚収められている。

未使用の絵葉書には、フランスの風景、教会や橋などの建造物、風俗が映し出され、なかには坂本がたびたび訪れたブルターニュの街並みやその地方の装束を身にまとう女性の肖像写真も含まれている。これらの絵葉書は坂本自身が訪れた場所で旅の記念に購入したものや、友人からお土産の品として受け取ったものかもしれない。いずれにせよ坂本が実際に目にした、あるいは写真を介して見たことのある風景や事物を我々はその絵葉書を通して確認することができる。1冊のアルバムに大

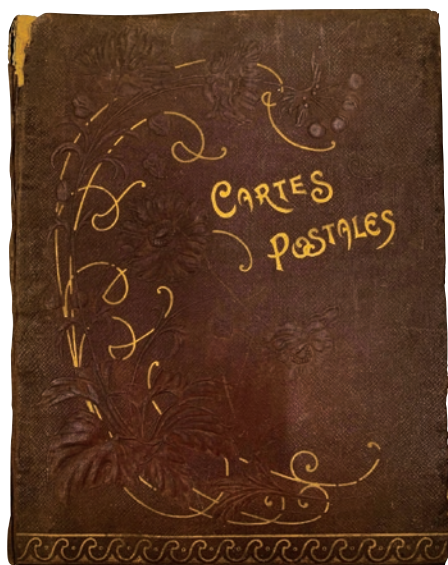


fig. 1
「坂本繁二郎旧蔵滞欧期のアルバム」1921–24年、38.5×30.0cm、
石橋財団アーティゾン美術館
Album of Postcards from Europe, formerly in the Collection of Sakamoto
Hanjiro, 1921–24, Artizon Museum, Ishibashi Foundation, Tokyo

切に収められた絵葉書は、貴重な留学の思い出であるとともに、滞欧期における創作の着想源となった可能性も高い。

これまで滞欧中の坂本の動向については、2006年に開催された「石橋美術館開館50周年記念 坂本繁二郎展」図録において、日記の一部が「坂本繁二郎滞欧期旅程一覧」として紹介された¹。その後、「石橋コレクション 日本近代洋畫篇」の特集が『國華』で組まれた際、筆者が、坂本滞欧期の代表作、《帽子を持てる女》のモデルについて言及したことがきっかけとなり、このモデルの写真を含む6点の写真の写しと日記の一部をご遺族よりご提供いただき、その内容については『館報』63号で紹介した²。このたびのアルバム寄贈は、その一連の流れを踏まえ、滞欧期の葉書は当時描かれた代表作のそばにあるのがふさわしいとご遺族のご厚意に依る。そのため当館より継続して同時期の資料を紹介することは意義深く、本稿において資料の概要について紹介したい。

1. 未使用の絵葉書

430枚の葉書のうち、前半324枚は未使用の絵葉書である。教会や城郭、橋などの建築物、街景、海景など、パリだけでなく地方の絵葉書も多く含まれる。絵葉書に記載されている地名は、ゲランド、ル・クロワジック、ブルターニュ、ベリール=アン=メール、ブザンソン、バルビゾン、ポン=タヴェン、アヴィニヨンなどである。

なかには、ベリール=アン=メールやアヴィニオン、さらにオルナンなど、同時代の画家モネ(1840–1926)やピカソ(1881–1973)、19世紀リアリスムの画家クールベ(1819–1877)の作品に関連する土地のものや、バルビゾン派のミレー(1814–1875)の家やアトリエが写されたものが含まれ、当時の日本人画家たちが著名な画家の制作地やアトリエを聖地巡礼のように訪れていたことを想起させる。ベリール=アン=メールについては、複数の絵葉書がアルバムに収められているが、坂本が実際に訪問したかは不明である。足を運んだ場所として明らかなのは、フォンテーヌブローの森に隣接するバルビゾンで、そこはミレーや、坂本が強い感銘を受けていたコロー(1796–1875)たち風景画家が19世紀に集った村である。「坂本繁二郎滞欧期旅程一覧」によれば、

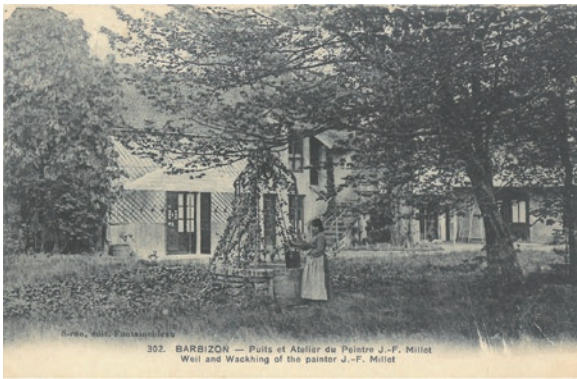


fig. 2
 絵葉書「バルビゾン—井戸と画家」= F. ミレーのアトリエ、8.8×13.8cm、
 石橋財団アーティゾン美術館
 Postcard "Barbizon – Well and Wacking [Well and Workshop] of the painter
 J.-F. Millet", Artizon Museum, Ishibashi Foundation, Tokyo



fig. 3
 坂本繁二郎《滞欧スケッチ帖4》1924年、23.6×15.5cm、個人蔵
 SAKAMOTO Hanjiro, Sketchbook in Europe 4, 1924, Private Collection

1922(大正11)年7月21日に、坂本はバルビゾン村のミレーの家を訪れた³。バルビゾンの絵葉書は2枚あり、家の建ち並ぶ通りの写った1枚には「605. バルビゾン—J.=F. ミレー終焉の家のある通り」、木の下で井戸の水くみをする女性とその背後に大きな家が写された1枚(fig. 2)には、「302. バルビゾン—井戸と画家 J.= F. ミレーのアトリエ」と記されている。

さらに、もう1カ所、坂本が確実に訪問したのは、クールベのアトリエである。スイスとの国境近くにあるフランス東部の町オルナンへ、坂本は帰国途中に立ち寄っている。1924年7月2日、友人たちに見送られるなか、パリのリヨン駅から画家仲間の林[林俊衛か]^{しげえ}(1895–1945)と鬼頭甕二郎(1897–1952)とともに21時55分発の夜行列車に乗り込んだ。翌朝4時にブザンソンに到着し、^{はざま}碓伊之助(1895–1977)の下宿先へ寄った後にホテルへ向かった。10日ほど滞在し、林がパリに戻った後、7月13日に坂本と鬼頭はオルナンへ行く。さらにその3日後、7月16日に坂本は一人で再びオルナンを訪れ、クールベの家を見に行った。当時のスケッチ帖には、水辺に建つ家のスケッチ(fig. 3)が「クールベの家」という書込とともに残されている。自然の実相を捉えるという点で、坂本はクールベに共感する部分が多くあったようで、オルナンにのべ5日間も滞在した。その後、鬼頭、碓と別れ、ブザンソン、アヴィニオン経由でマルセイユへ向かい、日本郵船の香取丸で帰国の途につく。



fig. 4
 「坂本繁二郎旧蔵滞欧期のアルバム」(1921–24年)より、
 石橋財団アーティゾン美術館
 From the album of Postcards from Europe, formerly in the Collection of Sakamoto
 Hanjiro, 1921–24, Artizon Museum, Ishibashi Foundation, Tokyo



fig. 5
 坂本繁二郎《ヴァンヌ郊外》1923年、油彩・カンヴァス、33.0×40.8cm、
 京都国立近代美術館
 SAKAMOTO Hanjiro, The Suburbs of Vannes, 1923,
 The National Museum of Modern Art, Kyoto



fig. 6
 坂本繁二郎《キャンペレ(滞欧スケッチ)》1923年頃、鉛筆、水彩・紙、
 14.2×23.6cm、個人蔵
 SAKAMOTO Hanjiro, Quimper, Sketch in Europe, c. 1923, Private Collection

以上のようなアトリエ巡礼の際に入手したと思われるもの以外に、アルバムにはブルターニュ地方の街並みや港、各地域の装束を身にまとう人々の絵葉書(fig. 4)が複数保管されている。1923年の3月から6月にかけて、坂本はブルターニュ地方へ5回も足を運んだため、それらはそのときに求められたものと推測される。この頃描かれたヴァンヌ(fig. 5)やキャンペレ(fig. 6)の街並みには煙突のある家々が描き込まれ、ブルターニュの風景



fig. 7
坂本繁二郎《プルトーニユ》1923年、油彩・カンヴァス、45.9×54.8cm、
愛媛県美術館
SAKAMOTO Hanjiro, *Brittany*, 1923, The Museum of Art, Ehime



fig. 8
絵葉書「ロクロナン—通り」、8.8×13.8cm、
石橋財団アーティゾン美術館
Postcard "Locronan, - A Street -",
Artizon Museum, Ishibashi Foundation, Tokyo



fig. 9
絵葉書「カイロ—スフィンクスとピラミッド」、8.8×13.8cm、
石橋財団アーティゾン美術館
Postcard "Cairo - Sphinx and Pyramids",
Artizon Museum, Ishibashi Foundation, Tokyo

(fig. 7)には白いコアフと呼ばれる頭巾や髪飾りを身につけた女性が佇んでいる。アルバムに収められたゲランドやルクワジック、ロクロナンなどプルトーニユ地方の絵葉書 (fig. 8) に写された家並みにも、同様に煙突のある家が並ぶのが認められ、坂本が目にしたと思われる当時の景色を想像する手がかりとなる。

このほか、スフィンクスやピラミッドのあるカイロ (fig. 9) や、

ポートセイドの街景、スリランカのコロomboの風景や女性像など、坂本が渡仏の際に乗船したクライスト丸や帰国の際に乗船した香取丸の寄港地と思われる土地のもの、パリ動植物園の動物の写真なども収められている。

本アルバムは寄贈されたばかりであるため、まだ全貌を把握できていない。詳しい調査は以後も継続して行うこととし、今後の課題としたい。

2. 通信文のある絵葉書

アルバムの後半部に差し込まれた絵葉書106通は、滞仏中の坂本に宛てて知人、友人から郵送されたものである。日本から届いたものもあれば留学仲間同士のものもあり、事務的な伝達や消息を交す他愛もない内容が多い。今日でいうeメールのような感覚で葉書を送り合っていたのだろうか。坂本の筆まめを思うと、おそらくこれらの葉書とは別にさらに封書なども交わしていたことが推測されるが、アルバムに遺されたものからだけでも、当時の坂本の交友関係や、当地での情報を交換する様子がうかがえて興味深い。106通の差出人は、一覧(表)の通りで、アルバムに収められている順に従い記載している。この中から4通ほど抜粋して紹介したいと思う。通信文については、現物通りに改行し、判読不能文字は□で示した。また[]は筆者の補記である。旧漢字は適宜常用漢字に改めた。

表 通信文のある葉書の差出人一覧

差出人	枚数	差出人	枚数
1 当舎 勝治	24	23 出井	1
2 小山 敬三	10	24 加藤 静児	1
3 安井 曾太郎	2	25 小野 操雄?	1
4 正宗 得三郎	6	26 安藤 東一朗	1
5 小松 清	8	27 佐々 真之介	1
6 里見 勝蔵	3	28 高村 道利	2
7 小嶋 善太郎	1	29 大下 正男	1
8 青山 義雄	1	30 長尾	1
9 濱田 葆光	1	31 新井 完	1
10 吉村	3	32 岡田 毅	1
11 北澤 楽天	2	33 遠山 五郎	1
12 鬼頭 甕二郎	1	34 田中 万吉	1
13 碓 伊之助	2	35 津田 青楓	1
14 斎藤 豊作	4	36 杉本 正子	1
15 中山 森彦	2	37 赤司 貴一	1
16 三木 露風(操)	2	38 松本	1
17 長島 重次郎	2	39 岡田	1
18 野口 弥太郎	1	40 差出人不明 A	1
19 中島 重太郎	1	41 差出人不明 B	1
20 S. 海老津	1	42 差出人不明 C(フランス語)	3
21 海老名 文雄	1		計 106
22 伊藤 錦子	5		
小喜多、伊藤 連名			

最も多く葉書をよこしたのは、当舎勝治(生没年不明)である。当舎は、1921(大正10)年7月31日、坂本が横浜港からフランスへ向けて出帆した際のクライスト丸の同乗者である。そのほかの同乗者に、画家の碓伊之助、林倭衛、小出樞重(1887-1931)、文芸評論家で仏文学者の小松清(1900-1962)などがいた。アルバムには、碓、小松からの葉書も収められている。当舎は1923年1月の坂本宛書簡でブルターニュへ行くことを薦めている。坂本がその年の3月からたびたびブルターニュ地方へ訪問した背景には、当舎の薦めがあったのかもしれない。

当舎勝治書簡(葉書) 1923年1月7日付

手紙、はがき封入のお便り
□に受取った。色々有りがたう。
ブルターニュへは是非行かれ
る事をお勧めする。
羅馬はこの二三日□寒さがゆるん
だ様だ。ラファエロのものは矢張り
このローマでないとほん当の処が分
らない。ヴァチカノに有る彼の一室
を見て驚いた。サノ・チ・ピエトロあ
たりの祭壇画の小さなものにい
のが有る。近日ナポリへ行ってく
る。便は矢張り大使
館へたのむ。風[邪]をひかぬ様御注意を
願います。正宗君に宜しく。

クライスト丸で同船した小松のほか、差出人一覧に名を連ねる小山敬三(1897-1987)、正宗得三郎(1883-1962)は、パリ14区の坂本と同じアパートに住んでいた。小松の葉書には、旅先に手紙を転送してくれた坂本へお礼を伝えるものなどがあり、互いに助け合っていたことがうかがえる。また、小山の葉書には、下宿先の家賃値上げに関する内容を知らせるものなどもあり、フランス語が堪能ではなかった坂本にとって留学仲間からの葉書が貴重な情報源のひとつであったことがわかる。

小山敬三書簡(葉書) 1923年日付不明

急に暑くなって日中の釣りは
一寸苦しい程です。巴里は如何。
今 妹の^マチュリエットが避暑に来てあなたが
ブルターニュから帰られた由聞きました
先達僕も御知らせしようと思って
居たのですが それはアトリエの家 僕が
来る十月から三百法一年分に対し値
上げをしたので 承知の方はコンセルジの処で
承諾のサインをするといふ事です。ジュリエット

が御話したのはその件です。多分もう
すんだ事でせうが 御通知します。

□に御変りありませんか。僕は毎朝五時
頃から浮標をにらんで居るので
す 夏の朝の川辺は静かです。魚は随
分釣れますよ。正宗氏へよろしく。

[表面]

とう着から一ヶ月も遊んで終わったので
これから大いに描きたい考。兎に角真黒に
元気ですから 御安心被下候

日本からの葉書には、坂本が結成にも携わった二科会に関する知らせもある。安井曾太郎からの便りは2つあり、二科美術展覧会(以下、二科展)への出品を促す内容や、巡回展の報告である。1通目は、消印に西暦の記載がないが、目白駅が改築されたのは1921年1月から1922年10月までの間であることから、その頃のものと思われる⁴。

安井曾太郎書簡(葉書) 年不詳[1922年か1923年] 7月16日付 (fig. 10)、(発)東京府下高田町高田1673

今頃、巴里の連中皆どうして
いるだろうと色々想像していま
す その後 元気ですか 二科会
も近づきました 御都合で何か
出してくれませんか たのみます 先
々月に日本でフランスの現代美術
展覧会がありました ポンナールや
ルッセルやゲランなどのものが可成揃っ
ていまして 日本では珍しい展覧会で
した 暑くなりました 僕は変化なく
暮しています 目白のステーションも新し
く立派になりました おからだをお大切に

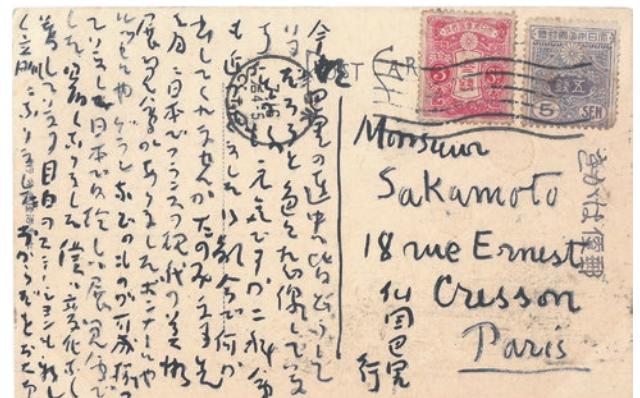


fig. 10
「安井曾太郎書簡(葉書)、年不詳[1922年か1923年] 7月16日付」、
9.1×14.0cm、石橋財団アーティゾン美術館
Postcard from YASUI Sotaro, Dated July 16th, Year unknown [1922 or 1923],
Artizon Museum, Ishibashi Foundation, Tokyo

安井曾太郎書簡(葉書) 1924年1月18日付(大正13年)

(発)東京府下高田町高田1673

謹賀新年

御無沙汰しています

二科は京都大阪福

岡に開催 大成功を

得ました 其の後如何

* 資料をご寄贈くださった坂本家ご遺族と、葉書の通信文解読において多大な協力を賜りました尾籠恵子氏に、この場を借りて深く感謝の意を表します。

(公益財団法人石橋財団 アーティゾン美術館 学芸員)

註

1. 坂本がフランス留学中に綴った日記は全7冊ある。全容は公開されていないが、その一部が尾籠恵子編「坂本繁二郎滞欧期旅程一覧」(『石橋美術館開館50周年記念 坂本繁二郎展』(展覧会図録)、石橋財団石橋美術館、石橋財団プリチストン美術館、2006年、214-223頁)において箇条書きで紹介されている。
2. 坂本《帽子を持てる女》のモデルについては、拙稿「解説 坂本繁二郎《帽子を持てる女》」(『國華』1425号、國華社、朝日新聞出版、2014年、56-59頁)や、拙稿「坂本繁二郎滞欧期の資料紹介」(『館報』63号、石橋財団プリチストン美術館、石橋財団石橋美術館、2014年、89-96頁)において紹介した。
3. 尾籠恵子編「坂本繁二郎滞欧期旅程一覧」前掲書、217頁。
4. 平岡厚子「目白駅駅舎の変遷に関する考察——一九二〇年代の橋上駅の問題を中心として——」(『生活と文化』[豊島区立郷土資料館研究紀要 第24号]、豊島区、2015年、43頁。目白駅の改築が完了した時期は明確にはわからない。平岡氏は諸資料を分析し、改築が行われた可能性のある期間を示している。